

御嶽山に登りたいと想っていた

日程：2015年 7月4日

メンバー：矢澤（L）、金田

報告：矢澤昭文

7月1日に御嶽山の立入禁止区域が、山頂である剣ヶ峰から、それまで半径3kmだったのが半径2kmの範囲に縮小された。この措置により、御嶽山の外輪にある五の池まで入れることになった。そしてその五の池から継子岳までは登山道が通じていて、そこに立てば剣ヶ峰を望むことができる。剣ヶ峰を外輪から望めるのは昨年9月27日の噴火の日以来である。御嶽山に対峙しなくなった。7月4日に金田さんと御嶽山に登ることにした。

御嶽山はこれまで何度も登っていた。愛知県からは最も登りやすい百名山、そして3,000m峰である。季節を問わず登っていた。山岳レースもあり、それにも幾度か参加した。自分にとって身近な高い山だった。それが昨年9月27日に噴火し多数の命を奪った。噴火した日の10日ほど前の9月16日に、御嶽山の黒沢口六合目から入り八合目の女人堂から三の池に出て、四の池から継子岳を経て五の池を経由し、そこから剣ヶ峰に達し下山していた。だから被害に遭われた方々が他人事には思われなかった。自分の身近な山、御嶽山が人の命を奪ったことに大きな衝撃を受けた。

さて、五の池へのルートの登山口は岐阜県の濁河温泉である。これまでの御嶽山登山のルートは、長野県の王滝口か黒沢口ばかりだった。今回の濁河温泉はかなり遠方だが道順はナビに任せた。それでも自宅から5時間はかからずに早朝の濁河温泉に着いた。

身支度を整えて6時30分に登山口を出発した。地図上のコースタイムは五の池まで3時間30分、ゆっくり登っても10時には着けそうだ。ただ天気だけが気になっていた。湯の花峠、のぞき岩を通過、いいペースだが、曇り空の下、鬱蒼とした樹林帯を進む。お助け水で、先行していた3名パーティに追いついた。速いですねという挨拶とともに、カメラが迫って来た。中京テレビですがという名乗りと同時に、いきなりのインタビューだった。きょうは慰霊の登山か？御嶽山はどうか？等々の質問に、御嶽山への想いとか、天気は残念だが初めてのルートを楽しみたい気持ちもある、等々返答した。

高度を上げると森林限界の札が出てきて、やがて周囲は真っ白な風光となった。コマクサの咲いているザレ場に付けられた登山道を登り切ると、五の池小屋が建っていた。時計の針は9時を指していた。標高差1,000m余りを2時間30分で登った。

ガスに加え、ここまで来ると風も強くなっていた。山小屋に寄る習慣が無いので小屋の前を素通りして継子岳に向かった。前方、ガスの中から一人の人間が現れた。この先、さらに風が強い所があるが大丈夫でしょうと言う。



その言葉で足を進めてみたが、風はさらによりももっと強く、先に行くのは止めることにした。継子岳から剣ヶ峰に対峙したかったが、目の前は白い世界が広がるばかりだった。

小屋まで戻ると、外に小屋のスタッフがいて中に入って休んでいってくれと言う。時刻も早く、食事も摂りたかったので小屋に入った。ホットワインとケーキセットを注文した。ホットワインの後に焼酎のお湯割りを頼んだら、コップと焼酎を持って来て、焼酎の量は自分で注いでくださいと言う。居心地の良い小屋だった。外にいた男性スタッフが小屋に入って来て名刺をくれた。この小屋の他に北アルプスの徳本峠小屋にも入ることがあると言う。霞沢岳へ登りたいとずっと思っていると返事する。さまざまな話をした。そして、今月の14日にこの小屋に再訪することを約束した。

中京テレビのスタッフも小屋に着いたようだ。ガスが薄くなり外は視界が少し開けた。外に出て合掌をしていると再びインタビューを受けた。二の池付近で亡くなっていた小学5年生か6年生だった女の子の話をした。どれほど怖かったことだろう。胸が詰まり声が出てこなくなってしまった。スタッフも涙声になりながら、金田さんにもインタビューしていた。自分が噴火に遭っていてもおかしくないほど御嶽山には多く登っていたので、他人事とは思えない、等々涙声で答えていた。

風が弱まり継子岳に向かうことにした。山道の所々に火山灰と思われるものが堆積していた。ガスの中、継子岳に立ち剣ヶ峰の方向に対峙して合掌。御嶽山からは何も聴こえてこなかった。ただ自分の内からゴメンよ、ゴメンよ、と聴こえてきた。

7月14日、御嶽山五の池小屋を再訪した。今回も濁河温泉口からの同じコースである。男性スタッフは徳本峠小屋に行っていて留守だった。至極残念だった。

前回は三の池に下るルートは通行止めだったが、この日は解除されていた。三の池の美しい湖面を見ていたら、御嶽山が悪いわけではないと、ふと思った。三の池から四の池へ、そして継子岳に達した。

前回よりは天気は良かったが、時々ガスがかかる剣ヶ峰に対峙した。御嶽山はやはり何も言わなかった。御嶽山に限らず、自然は何も言わない。そこに在るがままである。そう考えると言葉が出なくなる。自然とは？自分とは？そんな問答を繰り返しながらお山を歩いている。合掌。